

# 交換留学とその後、 そして国際教育のこれから

小島 平夫

## はじめに

40年前に遡って1971-1972年、私が本学在学中に与えていただいた交換留学というすばらしい機会は、その後の私が辿ってきた道に確かな足跡を残すことへと繋がった。そこで、特集テーマ「西南学院と国際交流」への本寄稿エッセイでは、まず前半（A、B）で、この交換留学体験が原点となった私自身の国際交流史、特に海外での「人的」交流を浮き彫りにした自分史を紹介し、次に後半（C）では、国際センター関係者の立場から、最近により重きをおいて本学の国際交流/国際教育の軌跡そしてこれからの展望について考えることにしたい。

## A. 交換留学生として初めての留学

### 1. 留学まで

留学したいという夢は、私が高校時代に希望していた将来の職業像（貿易商社員として海外勤務）を実現させるためにも自然に抱いていたものである。ただ、1970年当時の固定為替レート（1米ドル＝360円）の時代に、勿論私には海外留学は奨学金の援助なしには不可能であった。しかし、幸いにもそのような時に本学で交換留学制度が発足し、ニューヨーク州立大学オネオンタ校（以下、オネオンタ校）への海外派遣留学募集が始まったのである。交換留学であることからオネオンタ校での授業料負担はなく、奨学金も全額支給（旅費と生活費）と部分支給（旅費）があることから、夢が叶う大きなチャンスが目の前に突然現れた。それだけで興奮、喜びに浸っていたことが思い出される。

勿論現実には、厳しい競争試験として海外派遣留学試験が控えており、緊張の日々を過ごすことになった。当時（前述の、高校時代に考えていた職業進路も背景にあって）私は商学部商学科3年生で貿易論ゼミに所属していたが、留学試験科目のひとつ「英語」、それに英会話は中学、高校時代から好きで、特に英会話、英語表現の実践

力向上には、E.S.S.クラブ、「NHK ラジオ英語会話」（松本亨講師が懐かしい）そして本学に進学してからは福岡市東区の英語バイブルクラス参加なども通して、こつこつと励んでいた。

筆記と面接まで留学試験も無事終わり合格発表までは不安な毎日が続いたが、幸いにも全額支給奨学生として合格との通知を学内掲示板で知ることとなり、そのときの喜びと興奮は決して忘れられない。

その後夏休み前には正式に留学準備プログラムが始まり、併せて私のゼミ指導教授からは先生のご自宅で英語テキストによる経済学の指導も受け、留学への不安も少しずつ和らいでいった。

## 2. 出発からオネオンタ到着まで、そしてオネオンタ校での留学生活

オネオンタ校交換留学を果たした人はもう一人おられて、その方（文学部外国語学科英語専攻）と一緒に博多駅から東京駅そして横浜港に向い、横浜からは American President Line でおよそ10日間の船旅で（初めての外国体験でもあった）米国ハワイを経由してサンフランシスコに到着。続けてロサンジェルスに向かい、その後空路ニューヨークへ、更にマンハッタンからはグレイハウンドバスでオネオンタへと長時間のバス旅行であった。オネオンタでは本学との交流協定締結に携わった先生が迎えに来られ自宅に泊めて頂き、その後オネオンタ校内の学生寮 Golding Hall に移り、米国人ルームメイトとの2人部屋で（私にとって初めての寮生活とともに）本格的に留学生活が始まった。

約9ヵ月間、周囲に日本人がほとんどいない環境で留学生活を送ることになったが、オネオンタ校で知り合った人々はほとんどが今でも鮮明に顔を思い出され、彼らが優しく接してくれたおかげで彼らとの友人関係を通して、勉強以外でも予想もしなかった数々のことが果たせた留学生活を送ることができた。

### a. 授業の思い出

本学では商学科在籍であったことから単位互換もあって、オネオンタ校では経済学関係の科目を多く履修した（ミクロ経済学、マクロ経済学、国際経済学、現代経済諸問題、など）；専門外としては、文化人類学。当然のことだが担当教員の早い英語は分かりにくく、必死でノートテイキングをしたものだ。今でも顔とそのしゃべり方が鮮明に思い出されるのは、ミクロ経済学担当の眼鏡をかけた特に早口の先生、そして国際経済学の多少ゆっくりだったがインドなまりの強い細身の先生である。文化地理学は米国プエブロについてであったが、この先生の顔も今でも思い出され、こんな

分野を専門に勉強しても面白そうだなと当時強い興味を持ったりもした。本学での専門にとらわれず本学では開講されていないような科目を履修できたことで、オネオンタ校への留学はとても満足のいくものになった。

#### b. 課外活動で知り合った人々

留学中、人間関係はとても良好であった。寮のルームメイトとは問題一つなく、とてもいい関係で最後まで一緒に過ごせ（特に、彼が持っていた数々のロック音楽アルバムには当時強く感化され、その多くを現在はCD盤で私の家族とも一緒に楽しんでいる）、彼が時折部屋に連れて来るガールフレンドと彼女の女性友達もとてもつき合やすい人達であった。特に、彼を訪れて来る男子友達の一に national service fraternity の一つ“Alpha Phi Omega”（APO：<http://www.apo.org/>）のオネオンタ支部メンバー（いわゆる brother）がいて、このAPOではボランティアで社会奉仕活動をしているということで、彼の誘いもあって私も（正式な儀式を経た後）正規のメンバーとして参加することにした。私が参加した活動としては、障害児と触れ合う活動、クリスマスに向けてのチャリティーイベントなどが特に思い出深い。オネオンタ校で偶然にもこのルームメイトとの出会い、更にはこのAPOメンバーとの遭遇があったからこそ、APOでの貴重な社会奉仕活動を経験でき、それを通して友人関係が更に広がっていった。今現在は活動はしていないものの、私は1972年発行のAPOオネオンタ支部メンバーカードをもつ正式 brother であり、それを誇りとしている。

また、学期中の週末だったか、先ほど述べたAPOメンバーにはオネオンタの近くにある野球殿堂の町クーパーズタウンに連れて行ってもらうなど、現在MLBをシーズン中にはテレビ観戦している私にとって大切な思い出となっている。

### B. 交換留学を終えてその後

1972年6月終わりに帰国後、4年次生として（通常より遅く）就職活動を始めたものの、貿易商社への道はなかなか見えてこなかった。大学院進学のために再渡米を真剣に考えたりもしたが、勿論経済的裏付けもないままでは不可能であった。そのような時に国内での大学院進学を考える機会があり、経済的財政的支援が得られる機会を探りながら、しばらく本学の大学院での研究生生活を送ることとなった。

このことは結果として私にとって大きな転機となった。この転機を含め、以下に述べる私に起きた出来事の一つ一つは本学での交換留学体験がその源流となっている。

---

1 メキシコ北部とアメリカ南西部に残るインディアンの伝統的な共同体、または集落。またそこに住むインディアンを集合的に呼んだ言葉。

## 1. フルブライト奨学生として大学院留学

本学大学院では修士課程修了後、博士課程へと進学。再渡米し大学院進学する準備として何よりも財政的支援を得る必要があったので、修士課程2年次の時、日米教育委員会のフルブライト奨学金（米国大学院学位取得を目指す大学院生向け奨学金）に応募したが、全額奨学金の補欠合格であった（大学院学位取得を目指す院生向け全額奨学金は、文字通り、授業料、生活費、傷害保険を含む包括的奨学金である）。この結果は、その当時自然気胸を患って内科入院をし、そもそも体調面で海外留学の自信がなかった私にとっては幸いであった。

暫くして博士課程1年次の1976年夏にも同奨学金に再度応募し、この時は幸運にも全額奨学金の合格者として選抜された。ようやく財政基盤が整ったことから、同年秋には米国の経営大学院修士課程へ入学願書を提出し始め、幾つかから入学許可がおりたが、幸いにも翌年夏にはペンシルベニア州ピッツバーグ市にあるカーネギーメロン大学産業経営大学院（現在は The David A. Tepper School of Business）へと入学することができた。この産業経営大学院はこれまで8名のノーベル経済学賞受賞者を輩出しており、実はその内の一人が（まだ受賞するずっと以前の若いときに）担当していた Decision Analysis という授業を私は受けていたのはとても幸運なことだった。2年間の修士課程で学位 Master of Science in Industrial Administration（いわゆる M.B.A. に相当）を取得した後は、続けてカリフォルニア州ロサンゼルス市内の UCLA 経営大学院（現在は The John E. Anderson Graduate School of Management）博士課程に進学した。

博士課程ではファイナンスを専攻し、研究助手の期間も含め4年在籍したが、この間私を研究指導してくれた先生が私への財政的援助（授業料免除奨学金、J. Fred Weston Fellowship、研究アルバイトなど）にも気遣ってくれたことで、経済的に何の心配もなく長い間博士課程でファイナンス研究が可能になった。この間、J. Fred Weston Fellow として（博士課程必修の）doctoral research paper を仕上げ、これは3名の教授による面接審査などを経た後、合格判定をいただいた私の大切な研究論文となっている。

## 2. 再度の留学から帰国後

カーネギーメロン大学産業経営大学院修士課程そして UCLA 経営大学院博士課程あわせて6年間の再留学を終えて、ようやく帰国し就職活動を始めることになった。

幸いにも北九州市立大学で商学部専任講師として職を得、8年間勤めさせていただいた。同大学では私の博士論文の出発点となる研究を始めることができ、西南学院大

学に移任してからはその研究を更に深め、一冊にまとめ刊行したことで、1995年夏には九州大学大学院から博士（経済学）の学位を授与された。当時同大学院に在職しておられた先生との先立つ出会いがあって、このような名誉ある研究成果に私は導かれたのであるが、その出会いも遅れば本学での交換留学体験がその背景にあったことを強調しておきたい。

## C. 本学国際交流/国際教育のこれまでと今後

本学に職を得て暫く後に国際センター主任を任せられ、現在はセンター所長として公務に携わっている。こういった立場から、まず本学国際交流/国際教育の軌跡と現状について述べ、次にその今後の展望について2011年9月本学学長の欧州交流協定校表敬訪問（私も同行）を軸に考えたい。

### 1. 本学国際交流/国際教育の軌跡と現状

#### a. 軌 跡

1971-1972年に第1回交換留学生在が2名オネオンタ校に派遣されて以来40年を経た今、交流協定校も世界各国の29大学に及び、年間50名を超える本学学生がその交換留学派遣の機会に恵まれている。更に、本学留学生別科が1973-1974年に第1回交換留学生在をオネオンタ校、ベイラー大学、ロードアイランド大学から受入れて以来38年を経ており、現在は受け入れ交換留學生数も約50名に達している。本学の国際交流/国際教育は交流協定校の数、派遣そして受け入れ学生数といった規模面で着実に拡大し発展してきた。

更に現在は海外語学研修が夏期、春期に実施されており、参加学生は毎年約250名にのぼる（後のbでも再述）。また、2004年からは夏期日本語研修を本学で6月から7月にかけて1ヵ月間開講しており、過去数年海外大学（交流協定校含む）から毎年約30名の参加がみられる。加えて昨年夏には初めての試みとして日中韓大学共同授業が実施され、各大学から選抜された各10名（3ヵ国併せて30名）が各国の大学を巡回しながら英語による授業を受講した（cで詳述）。以下では、これら二つの国際教育事業を事例として、本学で国際教育を支援する体制が多様化、充実し、質的向上が促進されている様子をまとめておく。（本学国際交流/国際教育の現状についての詳細は、国際センター事務室で入手できるパンフレット『国際交流のススメ』を参照されたい。）

## b. 海外語学研修とその公的財政的支援

短期の海外語学研修は夏休みと春休みを利用した集中的語学学習であるが、現在10ヵ国に13の研修先大学が用意されている。言語は、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、中国語、韓国語の6言語を対象としている。

この研修についても各種の奨学金を支給しており、渡航支援奨学金と研修支援奨学金がある。更に、2011年度は、日本学生支援機構がこの年度から実施開始した留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）のショートビジットプログラムに対し、本学「夏期語学研修」「春期語学研修」を申請していたが共に採択されたことから、参加学生の内154名へ公的奨学金（各人8万円）の追加的支給が可能になった。

## c. 日中韓大学共同授業とその公的財政的支援

本学留学制度を補完する形で（初めての企画として）、2011年8月8日から22日まで短期集中の日中韓大学共同授業を、福岡市の本学、釜山市の釜慶大学校そして上海市の上海交通大学の3大学で実施した。これは、各大学から参加学生が10名選抜され計30名が各都市を巡回する、英語による共同授業となっており、各都市の歴史、文化、社会、経済などの講義に加えて、各都市でのフィールドスタディも行うユニークな（東アジアにフォーカスを絞った）国際学習体験となっている。この共同授業は、本学では商学部が「東アジア研究」として臨時開講し、受講生に単位修得の便を図った（授業内容の詳細は、SAINSポータルにてシラバスを参照）。共同授業の様子は、『ふくおか経済』10月号（2011年）にグラビア記事として掲載されているので参照されたい。

また、この3大学共同授業は2012年度以降も継続の予定であるが、2011年度については福岡県から「世界に打って出る若者育成事業」として採択され、学生一人当たり7万円の公的奨学金支給により学生の実質参加費負担は三分の一弱に抑えられた。

## 2. 本学国際交流/国際教育の今後の展望

本学の今後の国際交流/国際教育を展望する上で、2011年9月の本学学長による欧州の交流協定校表敬訪問は大きな意味を持つ。国際センター長として私も同行させていただいたので、まず（後のaで）表敬訪問の概要とその成果を記し、次に（後のbで）同9月の私と国際センター事務室長によるEAIE（European Association for International Education）会議参加の概要とその成果をまとめる。最後に（後のc、dで）、本学の国際教育促進に向けて（その理想的な方向性に言及しながら）考えを述べる。

a. 2011年9月学長による欧州交流協定校の表敬訪問とその成果

学長は、まずフランスの(南仏) エクスプロバンス (Aix en Provence) 市にてポールセザンヌ・エクス=マルセイユ第3大学 (以下ポールセザンヌ大学) 本部を訪問され、同大学法学部長、国際関係担当副学長、国際関係担当事務長らとのミーティングに出席。事務長からはポールセザンヌ大学の現況について、副学長からは国際交流の現状、法学部長からは法学部及び大学院法学研究科について現状の解説が行われた。本学については学長と私が概説を行った。

この訪問の成果としては特に、法学部及び法学研究科については今後本学とポールセザンヌ大学間で新たに学生交流を始めることが話題となり、研究科間そして学部間の協定のきっかけが掴めたことである。既に法学研究科については、学長がポールセザンヌ大学訪問中に、外国法システム専攻修士課程国際プログラムの協力協定の調印式が執り行われ、ポールセザンヌ大学学長と本学学長が協定書に署名を行った。これを契機に(研究科間協定に加えて) 学部間協定へも道が開かれていくことが期待され、この方向性は今後、本学全体の国際交流/国際教育のあり方として、他の学部にも徐々に認識され浸透していくことが強く望まれる。

次の訪問先はイタリアのトリノ市内トリノ大学ビジネス・経済学部で、ビジネス・経済学部長と面談し、互いの大学を紹介し、そして2012年から始まる学生交換について話し合った。トリノ大学の長い歴史を感じさせる学部棟、そしてビジネス・経済学



トリノ大学(イタリア)の総長ほかとともに(トリノ大学総長室にて: 左から筆者、Ajani 法学部長、本学パークレー学長、Pelizzetti 総長、Bertinetti 現代言語・文学部長)

部が提供する英語による3年課程（学位授与プログラム）などが印象的であった。トリノ大学総長室にも伺い、総長、法学部長、現代言語・文学部長とも面談した。トリノ大学との交流協定はこれらビジネス・経済学部、法学部、現代言語・文学部の3学部と締結しているが、加えて同大学では、本学主催の新たな海外語学研修（イタリア語）を2012年春季から開始する。2012年から始まろうとするこれらトリノ大学との交流が、本学学長の訪問により、より強いパートナーシップ関係を礎に深まっていくことと確信している。

続けてフィンランドのユバスキュラ市内にあるユバスキュラ応用科学大学を表敬訪問され、国際関係部長を中心に、大学の主だった教育施設（特に“Innovative Home”）およびユバスキュラ市の解説を受け、市内視察を行った。更に、グローバルビジネスマネジメント学科長とは、今後の学生と教員の交換について懇談した。また、ユバスキュラ応用科学大学学長および本学学長、私による、各大学の現状についてプレゼンテーションの機会も設けて頂き、続けて、ユバスキュラ応用科学大学の主な教員など4名による学部の現状についてプレゼンテーションも行われた。短い滞在ではあったが、国際関係部長の綿密な計画によりこのような深みのある意見交換の機会が実現でき、互いの大学関係者交流という面でユバスキュラ応用科学大学の表敬訪問は極めて有意義な成果をおさめることができた。具体的な成果の一つを次のbで述べる。

#### b. 2011年9月 EAIE 会議出席とその成果

表敬訪問日程終了後（学長は帰国され）私はデンマークのコペンハーゲン市に移動し、本学国際センター事務室長とともに EAIE 会議に出席した。この会議は新規交流協定校開拓に極めて重要な役割を果たし、実際その開拓の成果があったことを以下で報告したい。

同会議会場では、以下の欧州大学の国際教育関係者と面談し、今後の交流あるいは新規の交流協定について意見交換した：フィンランドのユバスキュラ応用科学大学、フランスのボルドービジネススクール、ノルウェーのノードランド大学、米国のニューヨーク市立ステットン・アイランド大学、オランダの Tilburg University、スウェーデンの University of Gothenburg、イギリスの Regent's College London、オランダの Hogeschool van Amsterdam / University of Applied Sciences。

更には同会場では、（先に本学学長が表敬訪問していた）ユバスキュラ応用科学大学の国際関係部長から直接、デンマークの University of Copenhagen (UC) 国際交流関係者（国際交流部長など）を紹介してもらって、彼女らとは UC と本学との新規交換留学協定について意見交換が実現できた。その結果、UC の国際交流部長からは



ポルドー・ビジネス・スクール（フランス）のコンラッド国際交流コーディネーターとともに（EAIIE 会議にて：左から筆者、コンラッド女史、小嶋国際センター事務室長）

Faculty of Humanities に所属の Head of the Section of Asian Studies, Minority Studies and Comparative Cultural Studies（以下、アジア部長）を紹介され、交流協定の可能性は彼と探るようアドバイスを受けた。そのアジア部長からは「Faculty of Humanities は西南学院大学とぜひ交流協定を結びたい」との積極的な返事が早速届いており、現在私はアジア部長と国際交流部長そして Faculty of Humanities 国際交流コーディネーターとは連絡を密に取りつつ、本学と UC 間の新規交流協定について話し合いを続けている。UC については、本学国際センター委員会を通して準備が整い次第（UC の視察などを終えた後）、新規交流協定校候補として本学各学部学科に協議をお願いする予定である。UC との新規交流協定の可能性が浮上したのも、本学学長がユバスキュラ応用科学大学を表敬訪問していただいた成果の一つであることを強調しておきたい。

#### c. 学部教育、大学院教育での英語による専門科目授業の充実

本学学長の所信表明に沿って、国際センターでは交流協定校の数的規模そして質的レベルの向上を図るために、海外の大学との学部間協定、研究科間協定も視野に入れて交流協定校の開拓を行いたいと考えている。その第一の理由として、各協定校において単位換算可能な科目がより多くより確実に提供可能となる（これは交換留学制度の根幹である）。二つ目の理由は、海外の大学は、本学留学生別科が提供している日

本研究に関する一般教養科目ではなく、各分野の専門科目が履修できる各学部、研究科との協定を希望するケースが多くなっている。(2011年9月にEAIE会議に参加し、この事実を改めて認識した。)しかし海外交流協定校の学生がもつ日本語能力は十分とは言えないことから、学部間協定、研究科間協定は、本学学部、研究科が日本語による授業のみの提供では締結が困難であり、英語による専門科目授業を本学で充実させることが必要となってくる。各学部、研究科で英語による科目を提供することで、日本人と留学生が共に学ぶ望ましい専門教育環境を更に整備することも可能となる。

英語による専門科目授業の充実を目指した最近の国際センターの取り組みとして、「2010年度1月から、英語による留学生別科科目を学部で臨時開講科目として提供」「2011年度夏期に、日中韓大学共同授業を実施(英語による授業を提供)」が挙げられる。これらの取り組みが、本学の今後の国際交流/国際教育の内容と質(多国の学生が共に学ぶ専門教育環境、専門科目の単位互換性など)を更に高めていく布石になることを期待する。

#### d. 九州圏内の国際交流/国際教育の拡充に向けて

国際センターは、目下、日米教育委員会(フルブライトジャパン)と日本英語検定協会国際事業チームの協力の下で、2012年留学フェア(本学そして九州圏内にとっても初めての大規模企画)を秋に開催計画中である。このフェアには、既に次の機関に参加を依頼して頂いている:米国大使館広報部(資料提供のみ)、日米教育委員会(以下確定)、プリティッシュカウンシル、オーストラリア大使館マーケティング事務所、カナダ大使館広報部、フランス大使館(検討中)。このように大規模な留学フェアを本学で開催することで、本学の国際交流/国際教育が今後更なる質的向上そして(アジア地域も含めて)世界規模で更なる空間的広がりをみせることに繋がっていき、併せて、今後広く九州圏内の他大学そして中等教育機関での国際交流/国際教育の拡充に向けても本学は貢献することになる。

(2011年12月1日記)